

平倉圭著『ゴダールの方法』と哲学

國分功一郎

Q. 映画と思考、映画の思考、映画が思考…

- ・ゴダール曰く「映画が思考する」（p.9）<sup>1</sup>。監督はその「証人＝目撃者 *témoin*」。映画が思考するとは？
- ・ゴダールによれば、映画とは「思考するフォルム」である（p.8, p.218）。ならば、「フォルム」とは？
- ・「フォルム」とは映画に映し出される諸々の形態のことではなくて、複数の形態を重ね合わせた時に現れる「モアレ状のパターン」<sup>2</sup>のことである（p.218）。
- ・一枚の映像はオリジナルな原事象へと送り返されてしまう。しかし二枚の映像はそうではない。二つの映像はその間で「類似」という、二つの映像にとって内在的な関係性の領野を創り出す（p.192）。  
→ゴダールにとって「見る」とはこの類似を見ることに他ならない（p.218）。  
→一つではなくて二つ以上から出発すること。「二つ以上の映像によって思考すること」（p.192）。

1. ドゥルーズの「躊躇」、そして「正しさ」について

- ・この「類似」は徹底しており、見る者を当惑させるほど。  
→たとえば、『ヒア&ゼア ことよそ』に現れる、ヒットラーとゴルダ・メイヤ<sup>3</sup>を重ねる映像。
- ・ゴダールにおいては諸々の映像が「類似」を通じて「なし崩し」的に結合されていく。
- ・哲学者ジル・ドゥルーズでさえ、こうしたなし崩しの編集を前にして躊躇を示す（p.184）。  
→ドゥルーズは「類似」という危険な問題を避け、「間隙」なるものを強調し、我々は「視覚的イメージの真の読解を行うには十分に成熟していない」からあの編集が受け入れ難いのだと述べる。
- ・ドゥルーズはここで或る問いを避けている。それが『ゴダールの方法』を貫く問い。  
→「結合が「正しい」とはいったいどういうことなのか」（p.34）。「正しい *juste*」はゴダール自身の言葉。  
→「所与のイデオロギー的「正義 *justice*」ならざる、「正しさ *justesse*」を音-映像の錯綜のなかから見出すこと」（p.36）<sup>4</sup>。

2. 映画の存在論からヒューム哲学へ

- ・「結合が「正しい」とはいったいどういうことなのか」は確かにゴダールの問いであるが…。
- ・映画の物質的条件。「映画は徹頭徹尾、構成主義的なメディアである。[...] 映画にはそれが到達すべき原事象は存在しえない」（p.28）。  
→映画も音-映像の編集、結合によって作られており、いかなる映画もこの問いから逃れられない。
- ・したがって、ゴダールは映画を通じて映画の存在論をやろうとしているのではないか。平倉圭はその存在論を書物の中で明らかにしようとする——書物と映画の差異に周到に注意を払いながら（p.12-13）。

3. ヒューム、信、ドゥルーズ

- ・ここで召喚されるヒューム哲学。曰く、観念はバラバラであり、そこから認識を生み出すのは信（*belief*）。
- ・ドゥルーズが『シネマ 2』の中で言う「この世界に対する信（*croissance*）」。

<sup>1</sup> 平倉圭、『ゴダールの思考』、インスクリプト、2010年。以下、同書からの引用にあたっては頁数を括弧内に記す。  
<sup>2</sup> モアレ【*moiré*】1. 木目や波紋模様を表した張りのある織物。また、その加工。タフタ・アセテートなどに施し、リボン・服地などに使われる。2. 幾何学的に規則正しく分布する点または線を重ね合わせると、その間隔の疎密によってできる斑紋。網版の多色印刷の際などに生じやすい。（大辞泉）  
<sup>3</sup> イスラエル側が多大な被害を被った第四次中東戦争の当時にイスラエル首相。ミュンヘンオリンピック事件の報復として行われた「神の怒り作戦」を承認（映画『ミュンヘン』の題材になった事件）。  
<sup>4</sup> 更に付け加えれば、「ただの映像 *juste une image*」から、類似を通じて形成される「複数の正しいイメージ *des images justes*」を発見していくこと。

→「ここには哲学的論証の言語の限界が、あるいは端的に一種の「失語」がある〔…〕。〔…〕ドゥルーズもまた〔…〕同じ失語の地点に直面していたのだとは言えないか」（p.48）。

・平倉圭はここを出発点に「正しさ」の探求に向かう。ヒントとなるのは『ゴダールのリア王』に現れるプラギー教授の「実例教育」（p.53）。

→「ゴダールの「結合」の奥義は、提示された音と映像の視-聴に内在することにおいてのみ伝えられる」。

・第2章では「音と映像の視-聴」の分析が、0.1秒単位での解析によって、同期／非同期というテーマのもとに圧倒的な強度で展開される。

#### 4. いくつかの「解」…

・「音と映像は原事象による統一を欠いている」（p.79）。

・「すべてが他の仕方でも組み替え可能なのだとすれば、ひとつの映画は決して完成されえない」（p.63）。

→アンヌ・マリー＝ミエヴィル的な「聴取＝批判」（p.171）との関係。

・「ゴダールが「正しさ」という語で問題化しているのは、この収束が、擬似でしかありえないにもかかわらず、同時に真でありうるような可能性である」（p.64）。

・「正しさ」は、時間的に変動する音-映像パターンの結合の場において感覚される」（p.310）。

・「類似」する複数のイメージは、外的世界への参照なしに、内在的な結合を「解」としてもらたす」（p.311）。

#### 5. カントが平倉圭『ゴダールの方法』を読んだらどうなるか？

・哲学史上の仮説。カント哲学が哲学的フォーマットを刷新。それ以降、いまもその上で哲学が進行。

・たとえばフーコー、ドゥルーズ、デリダはそれぞれの仕方でもそのフォーマットの乗り越えを目指した。

・カントによるそうしたそうした作業の出発点にあったのが、ヒューム哲学への批判。

〔太陽が日によって昇ったり昇らなかつたりすることがあったとすれば、また、〕「辰砂〔水銀と硫黄とからなる鉱物。深紅色または褐赤色で、塊状・粒状で産出〕が赤かつたり、黒かつたり、軽かつたり、重かつたりするならば、また、ある人間がこの動物に形を変えたり、あの動物に形を変えたりするならば、また、夏至において土地が作物に覆われていたかと思うと氷や雪で閉ざされたりするなどといったことが仮にあったとしたら、私の経験的構想力は、重い辰砂を、赤色の表象とともに思惟の内に受け入れる機会に恵まれることはなかっただろう。」「われわれの経験的構想力は決してその能力に相応しい何かを為しうるようにならなかつただろう。その結果、それは、われわれ自身に知られざる死せる能力として精神の奥底に隠されたままであつただろう」<sup>5</sup>。

→平倉圭はゴダールの映画を通じて、この二百数十年來哲学が突き当たっている難題に到達している。

→ドゥルーズはまた、ヒュームに戻ることでカント哲学の乗り越えを目指していた。

・ブレッソン映画の接続原理を問うドゥルーズの「創造行為とは何か？」に対する平倉圭の批判（p.48-49）。

→「手によって」というドゥルーズの答えは、次元のすり替えではないか。

→Oui! Mais...これはドゥルーズによる「実例教育」的解説としては読めないか？

・「正しさ」が「時間的に変動する音-映像パターンの結合の場において感覚される」ものであるのなら、「内在的原理」は「手によって」という答えによってしか示されないのではないか？

・カントのヒューム批判を踏まえると『ゴダールの方法』は更にどう展開できるだろうか？

・映画から人間の知覚の条件を考えたユクスキルはカント哲学に言及している（『生物から見た世界』）。

・認知科学の可能性。

<sup>5</sup> カント『純粹理性批判』、分析論、第一版、「構想力における再生の総合について」〔岩波版全集、第四巻、一八〇頁〕。